

## 美術評——小林正人個展「この星の家族」 孤独の中 内なる光に出会う

榎木野衣

小林がタイトルに据えた「この星」とはどこにあるのか。通常、私たちがそのように呼ぶ時、地球を指す。きっと、この星は小林の中にしか存在しない。けれども、地球でない余地が残るなら、画家と絵を見る者との間には共有できない溝が残る。それなら、私たちは同じ絵の前にいながら、同じ絵を見ていないことになる。私たちは小林の絵を前にして、どこまでも孤独なだけなのだろうか。

ともあれ、小林はこの星の内なるまたたきを手がかりに懸命に絵を描く。けれども、その光量はとてもわずかなので、そのためにはなにか特別な方法と、道しるべになる手がかりが必要だ。それが、小林という画家にしかできない異例の描き方（絵の具を直に手にとり、キャンバスをもう一方の手で支えながら擦り付け、同時に木枠に張りながら描いていく）と、それでもなお必要となる古典的なモデルの存在なのだろう。

だが、この星は地球ではないのだから、小林自身にとっても完全には到達しがたい未踏の彼方となる。そもそも絵なら、地球以外に存在するのは不可能だ。おのずと地球にある小林の絵は未完成となる。というより、未完成でなければ嘘になる。

このように、小林の絵には必ず対となる切り離されたペアが隠されている。これは実際にペアとなる絵があるかどうかとはまた別の次元の話だ。この星と画家自身、この星と地球、画家とモデル、絵とそれを描く行為、絵とそれを見る者——これらは極めて密接な関係にあるがゆえ、遠く離れてなお、互いを求めてやまないペアなのだ。

本展では、これらのペアが織りなす近くて遠い関係が、よりはっきりとした孤独感を漂わせながらも、さらに輝かしく祝福的に表出されている。それは、描かれたイメージと木枠との間の不均衡や、にもかかわらず眩いほどの明度を放つ画面とのギャップにはっきりと示されている。

それにしても、なぜ孤独と輝かしさが両立するのか。最初の問いに戻れば、それは小林の呼ぶこの星が地球でないからこそ現実のものとなる。内なるわずかな光に集中するため、画家はどこまでも孤独でなければならない。しかし同時に、そのことが叶えば、この星が放つ光は一人の画家にとって抱え切れないほど明るく、輝かしい光量まで到達する。

これらの絵を見て私たちが驚くような明るさ、輝かしさを感じられるのは、私たちの内にもまた、それぞれにとっての「この星」が存在しており、その光へと孤独に集中するすべがあることに気づかされるからだろう。それは通常の意味で絵を見る体験とはまったく違っている。

そのようなかたちで絵を見ることができると気づくことで、私たちは遠く離れて存在しながら、同じ「この星の家族」となる。逆説的な言い方になるが、小林の絵に対しては、見る者もまた限りなく孤独である時に初めて、絵に対してどこまでも近くありうるのだ。

初出 2021年10月8日東京新聞夕刊



「この星のモデル (ペア)」 2021年 ©Masato Kobayashi, courtesy of ShugoArts, Photo by Shigeo Muto  
対となる作品に「この星のモデル ランニングマン(ペア)」がある



小林正人, この星のモデル ランニングマン (ペア), 2021, oil, canvas, wood, 194x296x20cm

「この星の家族」 展示風景, シュウゴアーツ, 2021